

卒業

少し日差しが暖かくなってきた今日この頃、目に痛いほどの青空が広がっているが、私の心はどしゃぶりだ。

「卒業生、答辞。代表木村春」

「はい。」

（あ、代表先輩なんだ…）

ちよつとは卒業式に出た甲斐があったかも、と思ってしまった自分に腹が立つ。

（くっそ、相変わらず無駄にいい声…。足踏み外せばいいのに）

今日は私、山田咲と先輩の通う高校の卒業式。

とてもめでたい日のはずだが私の心は晴れない、なぜならひそかに片思いをしている先輩が卒業してしまうからだ。

（まあ、私が片思いなんてガラでもないか…）

そんなことを考えていると体育館内に退場の音楽が流れた。

「先輩、卒業しないでくださいーい！」

ざわざわ。ざわざわ。

「私たちずっと友達だからね」

ざわざわ。ざわざわ。

卒業式にはあるあるすぎる会話。そんな会話を聞きたくなくて、波留はその人の塊を横目にグラウンドから校舎に入った。

タン、タン、と屋上に続く階段を上がった。

錆びついた扉の取っ手を少し手前に引き、下に下げる。

ギィー、と大きな音をたてて開いた扉の向こうには、やはり鮮やかな青空が広がっていた。

「ハァ…」

小さな溜息をこぼしながら、咲はゆっくりと歩いていく。

（…先輩今どこにいるんだろう。どうせ女子に囲まれてエンジョイしてんだろうな）

たどり着いた先のフェンスにもたれかかりながら、在校中は、いや、きっと今も女子に高い人気を誇っているだろうあの男に想いを馳せた。

(ああ、今何時だろう…)

それからしばらく屋上でもだもだと時間を潰していた咲は、ふとそんなことを思いながら下を見ると、先ほどまで溢れかえるようにいた生徒も消え、グラウンドは閑散としていた。

「そろそろ帰るかな」

先輩も帰っただろし、などと思いながら咲は屋上を後にした。

「よお」

よし帰ろう、と卒業式と書かれた看板がでかかど置いてある校門をくぐろうとした時、声をかけられた。

先輩だ。だが咲はその声を無視して歩き続けた。

「おい、無視は無いだろ！」

その声に咲はチツ…と舌打ちをした後振り向いた。

「なんですか、先輩」

「なんですかってお前…。咲がいなかったから帰ったかな、って思ったけどお前の友達に聞いたら校舎にいるって言うから待ってたんだよ、で、俺になんか言うことあるだろ？」

春は卒業証書が入っているであろう筒と、真っ赤なカーネーションを咲の前に突き出した。

「……どうしたんですか、その格好。ゴリラにでも襲われたんですか。それともそういう趣味なんですか。楽しいですねー」

と、春の格好を見て言った。

春は今、学ランは着ておらず中のシャツのボタンも三つ目ほどまではずれ、ズボンのベルトもなかった。

「違うわ！ 全部女子の大部に持っていかれたんだよ。」

あいつらベルトまで取っていきやがって…、などとモテない奴からしたら「バルス！」という言葉しか返って来ないようなことを春はのたまった。

「で、なんで先輩はここにいますか。もしかして「おめでとう」を私に言わせるが為に残ってたんですか。」

「おつまえほんと可愛げないな。違うよ、今日で最後だから、咲と一緒に帰ろうと思ったんだよ」

春は苦笑ぎみに言う。

先輩からしたら私なんて仲のいい後輩、なのになんでそんなこと言うの。期待してしまう自分がバカみたいだ。

などと思考を巡らせていると、それに…、と春は続けた。

「ケジメ、付けとかないとな」

「ケジメ…？」

そう言いながら春はズボンの右ポケットをゴソゴソ漁り、目的の物を見つけるとほら、と咲に右手を突き出した。

「これ…」

「そ、第二ボタン」

春は咲の右腕を掴みボタンを渡した。

「でも、とられたんじゃない…」

「大群が来る前に自分でとつといたんだ。」

なかなかやるだろ、と春は得意げに笑った。

だが、今の咲にツツコミを入れられるような余裕など少しもない。

「この意味、わかるよな」

立ちつくす咲に、春は続ける。

「返事は今すぐじゃなくていい。ただ、お前に貰ってほしかったんだよ。」

先ほどと違う、春の寂しさを交えた表情に咲は戸惑う。

先輩がボタンをくれるなんて、そんなこと少しも考えてなどなかった。

何か言わなければ、そんなことをグルグルと考えれば考えるほど何も言葉がでてこない。

(私も…私も先輩が…！)

「じゃあ、帰るか」

重い空気を変えるように春は明るい声をだし、クルリと体の向きをかえ歩き出した。

そんな春をみて、咲はとっさに叫んだ。

「…待ってください！」

「私も…私も先輩が好きです！ずっと、好きだったんです」

春は動きを止める。

「だから、」

「俺と付き合ってください」

咲の言葉を遮り春が声を上げた。

「…はい。」

「てか、俺たち両想いだったんだな…」

ならもつと早くいえばよかった、とぶつぶつ言う春を見て咲は吹き出した。

「まったく、先輩ってヘタレですね〜」

ふと見上げた空はとても綺麗だった。

そんな卒業式の帰り道。